

と話す。東京の八王子市役所勤務を経て、

「コロナが収まったら取材に行きたいですね」と語った。

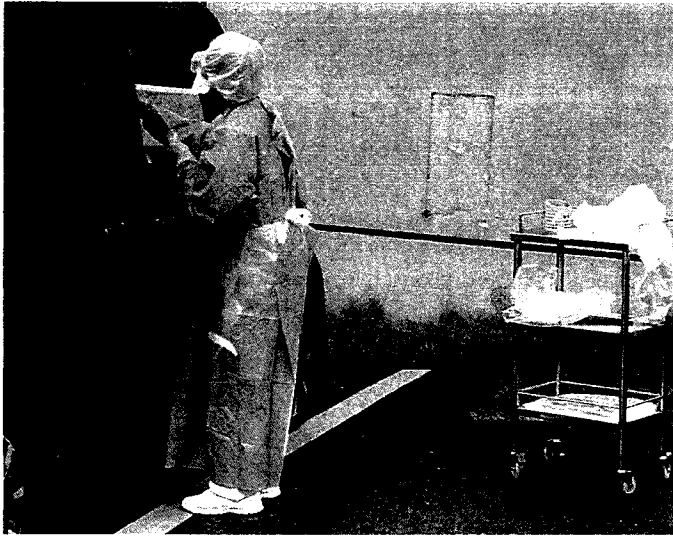
大教授(消化器外科学・腫瘍学) 森正樹(八戸市)

# 地域の病院 苦悩

## 医療を守ろう

新型コロナウイルスの感染が拡大する中、地域の病院が対応に苦慮している。感染が疑われる人の検査や診察に伴う直接的な感染リスクに加え、医療物資の不足、心ない差別もあり医療従事者の精神的な負担は大きい。千葉県内の規模病院の現状を取材した。

(藤川大樹)



ドライブスルー方式のPCR検査で車の窓越しに検体を採取する看護師長(千葉県内の病院で)

### 感染リスク

### 外来患者減

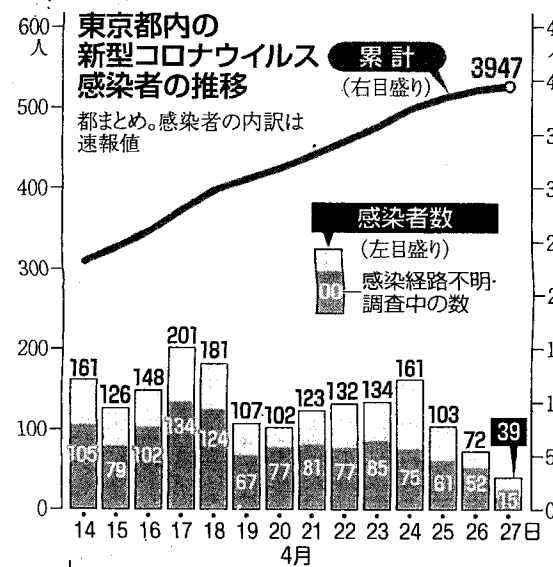
## 負担重

## 経営難

二十日午後三時ごろ、感染の疑いがある女性が乗用車でPCR検査を受けに来た。検査を担当するのは、ベテランの看護師長だ。手指を念入りに消毒し、医療用カウンや高性能マスク「N95」、ゴーグルを着用。正しく装着できているか、サポート役の看護師が厳しい目で確認していた。病院では三月末から「ドライブスルー方式」の検査を始めた。看護師長は車の窓越しに患者の血圧や体温を測り、綿棒で鼻から検体を採取。患者にはタブレット端末iPad(アイパッド)が渡され、医師による遠隔診察が行われた。患者一人にかかる時間は三十分程度だ。PCR検査は「感染管理」の認定看護師の指揮で、六人の看護師長が輪番で担当する。理事長は「内科医は二人しかない。医師が感染してしまうと診療ができなくなるため、看護師さんに最前線で活躍して

## 時間・動線・消毒に苦心 看護師がPCRも

もらっている」と、苦しい台所事情を明かす。PCR検査を始めたのは二月二十五日。この病院は感染症指定医療機関ではないが、感染症防止策に取り組み診療報酬の加算を取っていたため、保健所の依頼で検査を請け負った。当初は日に一、二件程度だった検査件数は、四月に入り目に見えて増加。これまでに百六十三件を実施した。病院の建物は感染対策を考慮した構造ではなく、院内で検査・診察をする場合は外来患者と時間をずらしたり、外来通路の一部を遮断して動線を分けたりする必要もある。息苦しさがある場合は肺炎を疑ってコンピュータ断層撮影(CT)検査を行うため、検査室の消毒も欠かせない。医療物資の不足は深刻で、本来ならこまめに取り換える医療用カウンは、ビニール製のエプロンを上から着けて交換頻度を減らしている。顔を保護するフェイスシールドは手作り。看護師の配偶者が勤務先から休職を求められるなど、風評被害も受けているという。



る人が増えているとみられ、新型コロナウイルス以外の外来患者や救急患者は大きく減少。三月の患者数は普段の約三割減、四月はさらに減る見通しで、理事長は「経営的には非常に厳しい」と声を落とす。それでも夏のボーナスは役員報酬を下げてでも支給する方針という。看護師長は「みんな張り詰めて仕事をしている。ボーナスをきちんと出さなければモチベーションが維持できない」と話す一方、「防護具や人の手当は病院の持ち出し。このままではつづけるような中小病院はつぶれてしまう」と訴えた。

## 都内新たに

新型コロナウイルスの新たな感染者が三十九人確認されたことが発表し、これまでに感染が確認済みの人のうち六人の死亡を明らかにした。新規の感染確認が五十人以上となったのは十三人だった三月